



いなば みのる

1938年生まれ/明治大学卒業/建築計画、市街地再開発、集落づくり/  
著書「住まいと街なみ百年のあゆみ」「住まいのとやま学」「とやまの  
住まい考」「富山の建築百選記念誌「百の共感」ほか/1998年第1回  
木材活用コンクール奨励賞、1999年第8回日本生活文化賞、2004年  
第1回木の建築賞受賞ほか/2000年黄綬褒章受章

## 選定理由

富山県南部の山裾に広がる「職藝学院」は、従来の建築教育の殻を大きく打ち破る学校として、10年前の開校時から全国的に注目された学校のひとつである。バブル期の頃、深刻な技能者の育成難や建築教育の行き詰まりを背景として、各地で多様な「ものづくり学校」構想が打ち上げられたが、この学校はそのなかでも開校以来抜きん出てめざましい成果を上げ、新たな「ものづくり教育」の地平を果敢に開拓し実践している。

稲葉實君は、同学院の理事長として、構想や開校準備の段階から今日の運営に至るまで、多様な支援関係者の先頭に立ってさまざまな困難を乗り越え、多大な貢献を果たしてきた。同君らが実践中の総合的教育プログラムは、以下のような点が非常に高く評価された。

第一に、伝統的な匠技を意味する「職」と、職人の心や新たな感覚を意味する「藝」を結びつけた「職藝人」の育成という独自理念の着実な実践がある。既成枠に縛られない自由な「専門学校」制度を活用し、「環境と建築の融合」「実習中心」「地域に根ざす」「伝統技能」という四つの指針のもと、マナーや古式を含む独自の教育プログラムを開拓している。志願者は広く全国から集い、卒業生は地元や全国各地へと活躍の輪を広げている。

第二に、在学中に「実際建物を建設する」という文字どおりの実践教育を中心に据えている点にある。1年次、主に校内での基礎実習のあと、2年次は各コース(建築は大工3コース、環境は庭師2コース)に分かれ、外に出て「実物実習」と称する実際の建物作りや庭作りに挑戦している。地域から提供される実際のプロジェクトを「実物教材」と位置づけ、住宅・古民家・ギャラリー・寺社・茶室・土蔵など多様な建物を対象に、新築から解体・移築・文化財修復・町作りに至るまで、累計120件余り(年10件前後)ものプロジェクトを実践している。具体的なプロジェクトへの緊張感、先人の知恵や技への触れあい、完成時の達成感など、学生への有形無形の教育効果を上げている。

第三に、これらを通しての地域社会への貢献がある。解体

の危機に瀕する古民家や修復手だてのない建物、町並み整備など、地域からの多様な相談事に応えながら、伝統文化への関心、後継者の育成、関係者の活躍の場やネットワーク化など、地域に積極的役割を果たしている。この仕組みは、棟梁やプロ専門家参加による実践的で強力な指導体制、地元関係者や企業等の幅広い協力など、多くの関係者の熱意に支えられたものである。

第四に、これらの試みを通し、全国規模で深刻化する次世代技能者の育成難、硬直化した建築教育の打破、地域や産業との積極的連携など、過渡期にある建築教育機関が切り開くべき新たな地平の開拓への貢献という点がある。

よって、ここに日本建築学会教育賞(教育貢献)を贈るものである。

## 受賞所感

職藝学院は平成8年の開校以来、工業系の建築と農業系の環境という異分野を互いにわかり合える新しい時代の「大工と庭師」を育成する学校としてスタートし、11年の歴史を刻んでまいりました。この間、社会に送り出した卒業生は合わせて550名余を数え、「職人の技=職」と「職人の芸術心=藝」を兼ね備えた「職藝人」を目指して広く全国各地で研鑽に励んでおります。

このたびの栄えある教育賞の受賞は、これまで暖かいご支援と励まして支えていただいた各界各層の多くの皆様、また教育現場で日々情熱と工夫を傾ける実践的スタッフ、そして職藝学院の教育理念と教育メソッドに共鳴して全国から参集した有為の学生達に対する顕彰と受け止め、関係者を代表して厚くお礼を申し上げます。

開校12年目を迎えた本年、これまでの教育プログラムをより一層昇華すべく、富山市西部地域に新たな『開ヶ丘キャンパス』を開設して次なる試みを展開いたします。

開ヶ丘では、キャンパスを囲む六つの集落の生活圈全体を学習の場とし、その実際の庭づくりや建物づくりを“実物教材”として、一過性ではなく継続的に地域を創り守っていく実習に取り組んでまいります。これは、単にひとつの建物や庭を完成させることを越えて、自然と人間との共存関係を常に念頭に置きながら進める“むらづくり・まちづくり・地域づくり”ということにほかなりません。

これからも初心を忘れず、地球環境を大切にすることを行動の原点に据えて、実践的プログラムを用いながら“職と藝を結ぶ教育をめざして”挑戦を続けてまいります。